事後評価報告書（実行団体用）

１．基本情報

１-１）実行団体名：特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

１-２）実行団体事業名：プロの芸術家による表現ワークショップを通じた当事者の交流及び共同創作事業

１-３）資金分配団体名：特定非営利活動法人まちぽっと

１-４）資金分配団体事業名：市民社会強化活動支援事業（Pecs）

１-５）事業の種類：草の根活動支援事業

１-６）実施期間：2020年５月から2023年３月

１-７）事業対象地域：東京都豊島区

2.事業概要

２-１事業計画と結果

２-１-１）優先的に解決すべき社会の諸課題

① 領域：1)子ども及び若者の支援に係る活動

② 分野：①経済的困窮など、家庭内に課題を抱える子どもの支援
②日常生活や成長に困難を抱える子どもと若者の育成支援
⑤社会的孤立や差別の解消に向けた支援
⑦安心・安全に暮らせるコミュニティづくりへの支援

③ 直接的対象グループ：児童福祉施設に暮らす子どもたちや退所した青少年、地域で支援を必要とする子どもたち

④ 間接的対象グループ：子どもたちの支援に関わる施設や団体、その職員、支援者等

２-１-２）事業の背景・課題

〇社会的課題

児童養護施設では被虐待児や障害のある児童の割合が増加。彼らは人間関係の構築や自己表現の課題を抱え、退所後も生きづらさを抱えがちで自立は容易ではない。施設入所理由も「虐待」か増加、家庭での子育てが難しい社会の現状がある。また、文科省の調査から経済格差による教育格差の問題も伺える。経済的貧困が子どもの低学力、低学歴につながり、所得の低い職業につかざるを得なくなる貧困の連鎖が生じる。

〇課題に対する行政等による既存の取組み状況

社会的養護の形は児童養護施設による「施設養護」から里親等「家庭養護」へと転換が図られ、児童養護施設には「子どもが育つ地域の子育て拠点」としての機能も求められている。また、 地域では「子ども食堂」等多様な居場所があり、困難を抱える子どもたちを複数の機関が連携・協力して地域で育てる取り組みも始まっている。しかし実態は様々であり、当事者に寄り添う草の根レベルの活動も依然必要である。

《中長期アウトカム》

東京都内において、児童養護施設に暮らす子どもたちや、子ども食堂等子どもの居場所に参加する子どもたちが、アーティスト・ワークショップを通して交流し、当事者同士や、関係施設や団体、連携機関等のつながりが強化される。また、多様な困難を抱えた子どもたちへの支援が拡充されるとともに、彼らの地域社会への参加や自立が促されることで、人と人の支えあいが可能な地域・社会になる。

２-２本助成事業終了後の事業活動（出口戦略）

当初は、児童養護施設を中心にした事業を想定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、児童養護施設では実施しないことになった。しかし、子ども食堂等を利用する、地域の困窮家庭や一人親家庭、外国籍の子どもたちや、母子生活支援施設ともつながりをつくることができた。豊島区では令和５年２月に児童相談所が開設されるなど、子ども支援を拡充する動きがみられる。また、豊島区の住民登録のうち１割が外国人と全国的に見ても外国人が多く暮らしている地域となっており、WAKUWAKUネットワークや豊島区社会福祉協議会などが連携して多文化共生を進める活動も行われている。そうした自治体の動きを注視し、地域の団体との連携協力をより強固にしながら、自治体事業として継続してできるように働きかけるなど、今後も、どのような環境で暮らしている子どもたちも、地域の中で文化芸術にふれながら、多様な他者との出会いを安心して楽しめる場を引き続き運営していく。

３．事後評価計画・実施概要

３-１事後評価計画

《評価項目・評価小項目》

〇アウトカムの達成度

事業を通して最終的に達成したい目標や中間的なアウトカムは達成されたか。

〇波及効果：

事業の実施によって当初想定した目標や中間的な成果以外の変化は確認されたか。

〇事業の効率性：

事業実施のためのインプットに対して成果の規模や質は妥当であったか。

３-２事後評価実施概要

３-２-１）評価ポイントの設定・実施（どのような変化をこの事業の重要なポイントとして設定し評価を実施したのか）

① 児童養護施設や、地域の子ども食堂等と連携して、当事者が参加する継続的なワークショップを実施することに関しては、実施施設数や日数、参加者数を指標として、ワークショップが実施されていない状態から、継続したワークショップが実施できている状態になっているかをポイントとして評価した。

② ２年目に、各実施場所での取り組みを他の施設等との間で共有し、職員同士や子どもた

ちの交流を図ることに関しては、実施施設等の数や日数、参加者数を指標として、ワークショップの実施に加えて、横のつながりができたかどうかをポイントとして評価した。

③ 交流を含むワークショップと発表会を行い、当事者の社会参加を促し自立を支援することと、記録冊子を発行することに関しては、実施施設等の数と、実施日数、参加者数、発表の観覧者数、記録冊子の発行部数を指標として、団体関係者に加えて当事者同士のつながりができたかをポイントとして評価した。

④ 施設や連携団体の職員、参加者へのアンケート、ヒアリングなどを通して、 評価委員と事業評価を実施し、改善点や新たな課題を明らかにすることに関しては、当事者など回答者の満足度を指標として、評価会議でのグループディスカッションにおいても議論した。

⑤ ワークショップ等の開催を特定の会場で実施することが困難な場合は、オンラインでの開催を試行し事業活動の円滑化を図ることに関しては、開催の可否や開催数、参加者数を指標として、評価した。

３-２-２）実施した調査（どのような調査を実施して測定したのか）

《短期アウトカム》

①東京都内において、ワークショップの実施により、社会的養護下にある子どもたちや、障害や、経済的理由などにより何らかの支援が必要な子どもたちが、安心して地域社会とつながりを持てるようになる。

○ 調査方法

・ 実績データの整理

・ アンケートの実施（主な項目は、ワークショップの満足度や自由記述による感想）

○ 調査実施時期

・ 2022年11月～2023年1月

○ 調査対象者

・ 事業に参加した子どもたちのうち、最終回の発表会に参加した17人にアンケートを配布。回答者数17名（回収率100%）。

○ 分析方法

・ 満足度についてデータを集計し、自由記述から子どもたちの事業に関する期待や課題を分析した。

②東京都内において、児童養護施設や子ども食堂等の交流が生まれることで、組織や職員、運営者など人と人との連携・協力が強化される。

○ 調査方法

・ 実績データの整理

・ アンケートの実施（主な項目は、満足度や子どもたちの変容について）

○ 調査実施時期

・ 2022年11月～2023年1月

○ 調査対象者

・ 連携団体である母子生活支援施設の職員と WAKUWAKU ネットワークのスタッフ、

ワークショップに携わったアーティスト（アシスタント含む）に対してアンケートを実施。10名が回答。

・　発表会を観覧した、参加者の保護者や連携団体などの関係者にアンケートを実施。26名が回答。

○　分析方法

・　満足度や、子どもたちの変容の有無についてデータを集計し、自由記述からより詳細な子どもたちの変容の様子や事業に関する期待や課題を整理して分析した。

③自らの事業を評価し、次の目的や目標、活動を明確化することにより、地域の新たな課題に気づくことができる。

○　調査方法

・　評価会議の実施

○　調査実施時期

・　2022年11月～2023年1月

○　調査対象者

・　連携団体である母子生活支援施設の職員と WAKUWAKU ネットワークのスタッフ、ワークショップを行ったアーティスト（アシスタント含む）、事務局スタッフ、評価アドバイザーで評価会議を実施。

○　分析方法

・　評価会議の中で、事業の成果や課題、今後に期待されることを意見交換しながら明確にしするとともに、評価会議の内容を文字起こしして、評価項目を整理して地域の新たな課題について分析した。、

３-２-３）調査結果の分析（調査結果をどのように深掘りし価値判断をしたのか）

①　参加した子どもたちの満足度や今後に期待されることに関しては、数値データに整理して評価するとともに、自由記述においては言葉や文字で表現することが難しい子どももいるため、WAKUWAKU ネットワークや母子生活支援施設のスタッフ、アーティストや保護者らの感想からも彼らの変化を聞き取りながら価値判断を行った。子どもと、子どもに関わる周囲の大人からも彼らの変容についての気づきを共有すること自体が、彼らと地域社会とのつながりを深める機会にもなった。

②　ワークショップの場に実際に立ち会っていなくても、子どもたちの送迎や、発表会の観覧、その他、地域での様々な支援活動で子どもたちに関わっている方など、様々な立場の方の意見から評価できるように工夫した。ワークショップ以外の生活の場での様子や、ワークショップや発表会を終えた後の様子なども交えて、日頃の子どもたちとの比較や、そこから見えてくる彼らの変化や新たな一面に関する記述も多く見られた。いろんな立場の方の意見を事業に活かしていくことが、つながりを強化するために価値のあることだった。

③　事業に携わった団体職員やアーティストと評価会議の場を設けることで、一人ひとりがどのような問題意識を持っていたかを明らかにし、事業を通してそれが改善されたか、次の課題は何かなどをしっかり共有することができた。そして、評価会議で挙げられた成果や課題をアンケートの回答とも照らし合わせて考察を深めた。

3-3 実施体制（内部/外部、評価担当役割、氏名、団体・役職）

《計画時》

・　芸術家と子どもたちスタッフ（内部）、児童養護施設職員（外部）、子ども食堂など運営団体スタッフ（外部）、アーティスト（外部）、評価アドバイザー（外部）

《事後評価実施時》

・　NPO 法人芸術家と子どもたち（内部）：堤康彦（理事長）、中西麻友（事務局長）
・　愛の家ファミリーホーム（母子生活支援施設）（外部）：小川景也
・　認定 NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク　（外部）：栗林知絵子（理事長）、石平晃子（理事）
・　アーティスト（外部）：渡辺麻依（演出家・俳優）、酒井直之（振付家・ダンサー）、中村大史（音楽家・作曲家）
・　アシスタント・アーティスト（外部）：佐藤円（俳優）、金子由菜（俳優）、豊田ゆり佳（ダンサー）
・　NPO 法人まちぽっと（外部／評価アドバイザー）：小林幸治（理事・事務局長）、金和代

4．事業の実績

4-1 インプットの計画と実績

4-1-1）資金

①　事業費（自己資金含む）　6,457,597　円
　＊内訳〔直接事業費〕　5,386,195　円/〔管理的経費〕　1,071,402 円

②　評価関連経費（計画時）　295,200　円/（実績額）　237,188　円（ご記入時点での額でご記入ください）

③　コロナ対策緊急支援追加額　370,000　円

④　助成額（計画時合計額）　6,665,200　円

⑤　助成額（実績合計額）　6,665,200　円（ご記入時点での額でご記入ください）

⑥　自己資金の種類と金額（計画時額）
　・種類：　寄附金　＝2020 年度：　143,855　円/2021 年度　10,072　円/2022 年度　685,460　円

⑦　自己資金の種類と金額（実績額）
　・種類：　寄附金　＝2020 年度：143,855 円/2021 年度　10,072 円/2022 年度　円

⑧　自己資金の調達で工夫した点など（自由記述）：
　ウェブサイトやメールマガジンを通じた寄附金の調達に努めた。今後、本事業の成果をウェブサイトや冊子を通じて発信しながら、さらに寄附金の調達に努めたい。

4-1-2）人材

①　計画時：

- 内部：合計７人（役員１人、管理担当者２人、事業担当者４人）
- 外部：合計６人（評価アドバイザー１人、派遣アーティスト２人、アシスタント３人）

② 実　績：
- 内部：合計５人（役員１人、管理担当者１人、事業担当者３人）
- 外部：合計９人（評価アドバイザー２人、派遣アーティスト４人、アシスタント３人）

４-１-３）資機材（事業で購入した高額の資機材の主要なものを記載してください）
① 計画時：PC１台
② 実　績：PC１台、ノートPC２台（緊急支援）

４-２活動とアウトプットの計画と実績
４-２-１）主な活動の計画と実績
《アウトプット（計画時：概要、指標、初期値/初期状態、目標値／目標状態、目標達成時期、実績値）》
① 児童養護施設や、地域の子ども食堂等と連携して、当事者が参加する継続的なワークショップを実施。
- 指標：・実施施設等の数　・実施日数(交流を含む発表会の日数を含む)　・参加者数
- 初期値/初期状態：0/ワークショップを実施していない状態
- 目標値/目標状態：・児童養護施設 1、子ども食堂等 2 ・実施日数 13日・参加者数 50 人
- 目標達成時期：2021 年 3 月
- 実績値：・子ども食堂と連携したワークショップ１か所・実施日数 計６日
  ・延べ参加者数 35 人

② ２年目に、各実施場所での取り組みを施設等の間で共有し、職員同士や子どもたちの交流を図る。
- 指標：・実施施設等の数　・実施日数　（交流ワークショップと成果発表会含む）・参加者数
- 初期値/初期状態：0/継続してワークショップが実施できてるが、横のつながりがない状態
  目標値/目標状態：・子ども食堂等 3 ・実施日数 13日・参加者数 50 人
- 目標達成時期：2022 年 3 月
- 実績値：・子ども食堂と連携したワークショップ２か所、母子生活支援施設１か所
  ・実施日数 計 14日（最終日は、子ども食堂と連携した２か所が交流）
  ・延べ参加者数 88人

③ 交流を含むワークショップと発表会を行い、当事者の社会参加を促し自立を支援する。記録冊子を発行する。

- 指標：・実施施設等の数 ・実施日数 （交流ワークショップと成果発表会含む）
- 参加者数 ・発表会の観覧者数 ・記録冊子の発行部数
- 初期値/初期状態：0/職員や、団体関係者などのつながりはあるが、当事者同士のつながりがない状態
- 目標値/目標状態：・児童養護施設 1、子ども食堂等 2 ・実施日数 14 日・参加者数 50 人
- 発表観覧者数 50 人 ・記録冊子 3,000 部発行
- 目標達成時期：2023 年 3 月
- 実績値：・子ども食堂と連携したワークショップ２か所、母子生活支援施設１か所
  ・実施日数 計 15 日
  （子ども食堂と連携した２か所の交流ワークショップ３回､子ども食堂と連携した２か所と母子生活支援施設１か所が交流した成果発表会１回を含む）
  ・延べ参加者数 105 人 ・発表観覧者数 33 人
  ・記録冊子 1,000 部を２月に発行予定

④ 施設や連携団体の職員、参加者へのアンケート、ヒアリングなどを通して、評価委員と事業評価を実施。改善点や新たな課題を明らかにする。

- 指標：・回答者(施設職員、子ども食堂等運営者、当事者、発表観覧者)の満足度
  ・評価委員を交えた評価会議の実施
- 初期値/初期状態：0/評価ができてない状態
- 目標値/目標状態：・回答者の満足度 80% ・評価会議の実施回数年 1 回
- 目標達成時期：2023 年 3 月
- 実績値：・回答者の満足度
  当事者 17 人回答 91%（5 段階評価…5 －13 人、4－3 人、2-1 人）
  実施施設職員や子ども食堂等運営団体 3 人回答 100%（5 段階評価…5 －3 人）
  発表観覧者 26 人回答 94%（5 段階評価…5 －19 人、4－6 人、未記入 －1 人）
  ・評価会議 3 回実施

⑤ ワークショップ等の開催を特定の会場で実施することが困難な場合は、オンラインでの開催を試行し事業活動の円滑化を図る。

- 指標：・開催の可否、開催数、参加者数
- 初期値/初期状態：開催が困難
- 目標値/目標状態：・開催数 5 回、参加者数 20 人
- 目標達成時期：2021 年 2 月
- 実績値：2020 年度にオンライン WS のテストを実施済

（ワークショップは全て対面で実施できたので、オンラインＷＳは開催せず）

《主な活動》

① 新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、児童養護施設でのワークショップを始めることはできなかったが、１年目に、私たちと同じ豊島区で子ども食堂やプレイパークなど子供関連の支援活動をしている「認定 NPO 法人 WAKUWAKU ネットワーク」とつながりが生まれた。その時点では、子ども食堂も、コロナの影響で対面での活動が再開できていなかったが、WAKUWAKU ネットワークとつながりのある子どもたちで、区内の困窮家庭やひとり親家庭の子どもたちを対象に演劇ワークショップを始めることができた。WAKUWAKU ネットワークと連携したことで、当団体だけではアプローチしづらい、一般家庭で暮らしながら支援を必要としている子どもたちとのつながりができ、コロナ禍で様々な活動が制限された状況でも、対面でのワークショップを月１回程度のペースで継続して開催し、最終回には関係団体などのスタッフを招いて発表会を開催することができた。

② ２年目は、１年目の演劇グループに加えて、ダンスグループのワークショップが始まった。演劇は元々演劇に興味のありそうな小学生が中心だったが、ダンスグループは中高生や、ネパールにルーツを持つ子どもたちが加わった。元々WAKUWAKU の活動の中でダンスが好きそうな子たちだったことと、言葉の壁がなく楽しめる活動ができるようにしたかったこと、そしてゆくゆくはグループを越えた交流を想定していたので、多様な表現ジャンルが混じるようにダンスのアーティストに依頼した。また、WAKUWAKU ネットワークを通じて豊島区内の母子生活支援施設「愛の家ファミリーホーム」とのつながりができ、ホームを利用している中学生と音楽のワークショップを始めることとなった。施設職員の方との打合せを通して、参加が想定された子どもたちが音楽を好きで、楽器の演奏に興味があることから、いろんな楽器を持参してワークショップができるアーティストに依頼することにした。そして、２年目は計３グループのワークショップを開催。演劇とダンスグループは、最終回の発表を同じ会場で行い、お互いの演劇やダンスの発表を鑑賞し合い、３年目の交流のきっかけとした。

③ ３年目は、グループとしては２年目から継続して、演劇、ダンス、音楽の３つのグループでワークショップを進めた。演劇とダンスは３回の交流ワークショップを設けて、最終回には、そこに音楽グループも加わり、３つのグループで１つの作品を創作して発表公演を開催した。年齢や国籍、生活する場など子どもたちの背景は様々だったが、一つの作品を協力して発表することで、国籍や言葉を越えて自然な交流が生まれていた。観客も、施設職員や保護者、子ども食堂や学習支援、日本語教室の指導に関わる方など多岐にわたり、上演後には子どもたちと観客が感想を伝え合う場も設けて、子どもたちを地域で見守り育てていることが感じられる場所にもなっていた。

また、３年間の活動をまとめた記録冊子を発行して、地域の中で生きづらさを抱える子どもたちに、アートを通してどのような支援ができるか、またアートに限らず人と人、団体同士がつながり、支援の輪を広げることの意義や可能性を引き続き考え、理解や支援を広げていくために活用するツールとしていく予定。

④ ワークショップに参加した子どもたちは、言葉や文字で表現することが苦手な子もい

たので、子どもたちのアンケートのほか、子ども食堂やプレイパーク、学習支援などを通して日頃彼らの支援に携わっているWAKUWAKUネットワークや、母子生活支援の職員から、彼らの変容や、普段とワークショップでの違いなどを共有してもらうことを大切にした。毎回のワークショップの前後にも振返りの場を設けていたが、実施後のアンケートでも、子どもたちの変容に関する質問項目を加えた。また、アシスタントを含むアーティストたちにも、普段のワークショップやアーティストとしての作品発表など活動と、今回のような状況にいる子どもたちとの出会いを通して見えてくることなどを回答してもらうようにした。評価会議でも、子どもたちの変化や、アーティスト自身の変化についても議題として取り上げながら３年間の活動を振り返って成果や課題を明らかにするよう努めた。また、評価会議の記録を一部記録冊子に掲載するとともに、全文を当NPOのWEB上でコラム記事として公開することにして、数値に表れにくい一人ひとりの子どもたちの変容を通して見えてくる事業の効果や成果について、広く一般に伝えていけるように工夫した。（冊子発行とコラム公開は２月の予定）

⑤ コロナ禍でも円滑に事業を進められるよう、対面で実施が難しくなった場合の対策として、アーティストとオンライン・ワークショップのテストを行った。オンラインでも双方向とのやり取りを大事にして進める工夫や、必要な機材とその使い方について試行した。

《主な活動における実績》

① 児童養護施設への働きかけを行ってからWAKUWAKUネットワークへのヒアリングを始めたので、ワークショップの開始時期が年度後半の11月からとなったが、月1回程度のペースで３月まで継続的にワークショップを実施。WAKUWAKUスタッフの送迎の協力もあり、欠席や途中でやめてしまう子どもは少なく、初年度から、年度の最終回には子どもたち一人ひとりの良さを生かしたオリジナルの作品を発表することができた。『クレクーレ女王ときれいな世界～仕立て屋ハリーと村人たち～』と題した作品で、楽器や、影絵を使った演出、ワークショップの中で遊びのように取り組んできたシーンなどを織り交ぜて、保護者やWAKUWAKU関係者に披露した。発表の前に緊張などから出ることに抵抗を示した子もいたが、最終的には全員が出演し、終わった後には自分から感想を述べたり、観客に感想を聞いたり、積極的な姿が見られた。そうした様子を経て、次年度以降もぜひこのワークショップを続けていこうという関係者間のつながりも深めることができた。

② ２年目は、演劇グループに加え、ダンスグループ、母子生活支援施設の音楽グループと、実施グループが1つから３つに増えた。また、子どもたちの背景も、困窮家庭やひとり親家庭だけではなく、外国籍の子どもとの出会いがあり、年齢も小学生中心だった1年目から、中高生へと広がった。アーティストについても、WAKUWAKUネットワークを通じて、音楽やダンスを取り入れた演劇ワークショップの経験のあるアーティストを紹介してもらい、関わるアーティストの数も初年度の３人から、６人へ増え、それぞれのグループの特性に応じたジャンルのワークショップを提供することができた。演劇グループは２年目になって新しい子どものメンバーも加わり、より即興的な要素を

増やしてアーティストが事前に枠を決める程度を減らし、子どもたちの創造性や自主性を活かしながらの創作が進められた。ダンスグループは、外国籍の子が中心となったため、言葉が障壁にならないよう、ネパールの音楽を使ったダンスや、楽器を使って動きに音を付ける活動なども取り入れて、パフォーマンスをつくり上げた。音楽グループは、楽器に興味がある中学生が参加。音楽家が、たくさんの楽器を紹介し、まずは彼女たちの興味関心に寄り添いながら、何をしていくかを子どもたちと一緒に考えていくようにした。

そして、2年目の発表会では、演劇グループとダンスグループが同じ会場で、それぞれの発表を鑑賞し合い、交流のきっかけを生み出せるようにした。

豊島区という地域を中心に、行政の支援につながらない人たちを、地域の人たちが様々な形でサポートしていることを知り、そうした団体や子どもたちとのつながりができたことは大きな財産であり、アートが子どもたちの支援の一つになり得ることの理解も深められた。

③ 3年目は、演劇グループとダンスグループが交流しながら一つの作品を創作し、最終日は、そこに音楽グループも加わって、『にんげんとようかいの旅』という作品を発表した。演劇、ダンス、音楽という多様な表現方法が混じった作品が完成した。子どもたちは、交流を重ねるごとに、作品づくりを通して少しずつ関係性を築き、年齢や国籍を超えて交流することができた。ワークショップの中で、一緒に演じたり踊ったり演奏したり、身体を使ってコミュニケーションを取りながら、当事者同士のつながりを深めるとともに、それを支えるアーティスト同士の交流も生まれて、子どもたちの支援の輪が広がった。

<table>
<tr><th></th><th>1年目</th><th colspan="3">2年目</th><th colspan="3">3年目</th></tr>
<tr><td></td><td>グループA（演劇）</td><td>グループA（演劇）</td><td>グループB（ダンス）</td><td>愛の家（音楽）</td><td>グループA（演劇）</td><td>グループB（ダンス）</td><td>愛の家（音楽）</td></tr>
<tr><td>参加人数（延べ）</td><td>35人</td><td>57人</td><td>27人</td><td>4人</td><td>54人</td><td>39人</td><td>12人</td></tr>
<tr><td rowspan="3">WS日数</td><td rowspan="3">6日間</td><td>7日間</td><td>4日間</td><td>2日間</td><td>3日間</td><td>3日間</td><td rowspan="2">5日間</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">1日間（合同発表会）</td><td rowspan="2"></td><td colspan="2">3日間（A＆B交流）</td></tr>
<tr><td colspan="3">1日間（発表会）</td></tr>
<tr><td>観客数</td><td>27人</td><td colspan="2">25人</td><td>（発表無）</td><td colspan="3">33人</td></tr>
<tr><td>アーティスト
アシスタント</td><td>3人</td><td>3人</td><td>2人</td><td>1人</td><td>3人</td><td>3人</td><td>1人</td></tr>
</table>

④ 子どもたちや、施設、団体職員、アーティストへのアンケートの結果からは、満足度の高さと日頃の様子と比べて、ワークショップを通して子どもたちが成長し、変化していった様子が伺えた。アンケートに記載のあった具体的な事例は以下の通り。

●演劇グループ

・　昨年までの２年間、継続的に参加していた子どもは、２回（または１回）の発表経験とこれまでの達成感を経験しているため、参加前から楽しみにしていた事業でした。月に１度の練習も、楽しみにしている様子でした。スタッフのみなさんが常に肯定してくれる場だかからこそ、自分らしく、思い切り自身を表現できたと思います。

・　演劇にぜひ参加してほしい家庭は、なかなか送迎や演劇参加に関する協力を得ることが難しい家庭でした。だからこそ、演劇参加のために、毎月親と連絡を取り合い、送迎時に親と会話を重ねて関係を深めることができました。

・　今年は演劇とダンスチームが互いを尊重しながら発表している様子に感動しました。

●ダンスグループ

・　昨年、今年と参加させてもらったネパールの女の子たちはみな小学高学年か、中学生になって来日した子達です。去年と今年、どのような経緯でネパールのダンスを披露することになったのかわかりませんが、衣装を身に付け堂々と踊る様子の解放感は、学校生活ではなかなか見られないものであったと思います。

・　勉強会の時間では、勉強面での対応にどうしても比重が置かれるので、子ども達の文化的な側面を引き出すようなことまではできません。日本語での勉強になるので、日本語ができないことを毎回つきつけられる時間でもあると思います。ですので、私たちでは開けてあげられない引き出しを、彼女たちが自ら開けて披露するまでやっていただけたことに大変感謝しております。

●音楽グループ

・　普段交流が少ない年下の子どもたちと協力して一つの作品を作るという貴重な経験をさせていただきました。緊張しつつも堂々と演奏をやり遂げる姿を見て、参加した子たちの責任感の強さを改めて感じることが出来ました。

・　のびのびとした雰囲気のワークショップを通し、アイデアや希望を正直に話して、それが採用されるという経験もたくさんさせていただきました。普段から自分の持つ考えを素直に話しても良いという自信に繋がったかと思います。最近は、職員に気を遣いすぎることなく、良い意味でわがままに話せることが多くなったように感じます。

⑤ ワークショップは、十分な感染症対策を講じて、2020年度は全て対面で実施することができた。一方で、緊急支援枠で購入した機材で、アーティストとオンライン・ワークショップのテストを１回実施。オンラインが初対面となる子どもたちと関係性を築くことは難しいと感じたが、既に関係性を築いた子どもたちとであればいろいろな可能性が考えられるので、2021年度以降、状況に応じてオンラインで対応できるようにした。

４－３外部との連携・協力などの実績

○　児童養護施設とのつながり

実施には至らなかったものの、１年目（2020年度）には、北区にある児童養護施設星

美ホームでのヒアリングを実施。ワークショップの実施を打診したが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、外部との接触や外出しての活動が難しいとの理由で実施には至らなかった。しかし、児童養護施設で暮らす子どもたちにとって、ワークショップのような表現活動の場が必要であることの理解は得られたので、今後このつながりも活かしていきたい。

○　地域で子ども支援に携わる団体とのつながり

認定 NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワークは、当 NPO と同じ豊島区内を拠点に活動しているので、存在を知ってはいたが、本事業を始めるまで直接的な関りはほぼなかった。しかし、子ども食堂を利用しているような、困窮家庭の子どもたちにアプローチしたいという想いがあったため、NPO 法人まちぽっとからの紹介も経て、ヒアリングを実施。普段子ども食堂や学習支援での活動でつながりのある、区内の困窮家庭の子どもたちを対象に新たに参加者を募ってワークショップを始めることについて協力を得た。WAKUWAKU ネットワークと連携したことで、当団体だけではアプローチしづらい、一般家庭で暮らしながら支援を必要としている子どもたちとのつながりができた。

ワークショップを始めるにあたっては、WAKUWAKU スタッフより子どもたちの特性をヒアリングして、例えば特別支援学級に在籍しているなど、個別に配慮する事項についても、アーティストなどと共有してワークショップに臨んだ。また、WAKUWAKU ネットワークからの提案もあり、個人情報に関する誓約書を取り交わしたうえで、子どもたちの背景を可能な範囲で共有してもらい、ワークショップの後には改善点などを相談する振返りの時間を設けたことが、子どもたちへの理解を深めるのに役立った。

WAKUWAKU のスタッフの話によると、家庭の状況が落ち着かなかったり、学校を休みがちになっていたりする子もいたが、ワークショップでは、個々がやりたいことが尊重され、お互いを受け入れ合う雰囲気の中で、自己表現や他者とのコミュニケーションを楽しむことができることが、子どもたちの参加意欲を高めることにつながったということだった。

また、各年の発表会には、ワークショップに参加している子どもたちの保護者だけではなく、WAKUWAKU ネットワークを通じて、子ども食堂や学習支援、日本語教室で子どもたちの支援に携わる人にも案内してもらい、発表会を通して地域で子どもたちを見守る多様な大人たちが集まる機会をつくることができた。

そのほか、毎回のワークショップについての子どもたちへの周知や、送迎なども WAKUWAKU スタッフの方々の協力があったので、自分一人だけだとなかなか活動場所に集まりにくい子どもたちが継続的に参加することができた。発表会や振返りの場で、ワークショップの効果や成果について意見交換するとともに、年度の初めにはその年度の計画や方向性について打ち合わせる場も設けて、丁寧にコミュニケーションを図ったことで、連携がスムーズに進んだ。

○　母子生活支援施設とのつながり

児童養護施設での実施には至らなかったものの、WAKUWAKU ネットワークを通じて、WAKUWAKU の活動に参加している子どもたちの中には、母子生活支援施設を利用している子どもたちがいることを知り、同じ豊島区内にある「愛の家ファミリーホーム」を紹介していただいた。施設にヒアリングに出向き、事業説明や、施設のニーズについて

打合せを行い、音楽に興味がある子どもたちとのワークショップを始めることができた。児童養護施設と同様、外部との接触や外に出かけることに制限もあったので、まずは施設内の実施から始めた。２年目の２月からのスタートで他のグループよりは遅いスタートとなったが、施設内でワークショップ担当の職員の方を決めてくださり、ワークショップ前後には子どもたちの近況や活動中の様子を振り返りながら内容についての打合せを重ねて、子どもたちに丁寧に寄り添いながらワークショップを進めることができた。３年目の発表会には、施設を出て会場で他のグループと一緒に作品に参加することができた。

４-４成果の分析（アウトカムの達成度と分析）

４-４-１）短期アウトカムの計画（計画時：概要、指標、初期値/初期状態、目標値／目標状態、目標達成時期)》

① 東京都内において、ワークショショップの実施により、社会的養護下にある子どもたちや、障害や、経済的理由などにより何らかの支援が必要な子どもたちが、安心して地域社会とつながりを持てるようになる。

- 指標：・ワークショップ実施回数　・当事者アンケートの満足度
- 初期値/初期状態：0/当事者と地域のつながりがない状態
- 目標値/目標状態：・ワークショップ合計43回・当事者の満足度 80%
- 目標達成時期：2023 年 3 月

② 東京都内において、児童養護施設や子ども食堂等の交流が生まれることで、組織や職員、運営者など人と人との連携・協力が強化される。

- 指標：・参加した施設、子ども食堂等の数　・実施施設職員や関連団体の実施後アンケート　・連携協力した団体などの数
-
- 初期値/初期状態：0/地域の中で関係団体のつながりがなく、課題や改善策が不透明な状態
- 目標値/目標状態：・施設+子どもの食堂の数 3 か所　・実施後アンケートの満足度 80%　・連携協力した団体の数 10 団体
- 目標達成時期：2023 年 3 月

③ 自らの事業を評価し、次の目的や目標、活動を明確化することにより、地域の新たな課題に気づくことができる。

- 指標：・評価会議の実施
- 初期値/初期状態：初期値：0/評価ができていない状態
- 目標値/目標状態：評価会議の回数 1 回/年
- 目標達成時期：2023 年 3 月

４-４-２）短期アウトカムの達成度（実績：概要、実績値、要因、課題など）

①概　要：子ども食堂等を利用する、豊島区の困窮家庭やひとり親家庭の子どもたち、外

国にルーツをもつ子どもたちが、演劇やダンス、音楽などのワークショップに参加し、他者との創造的な表現活動を経験する場を創出することができた。そして、彼らが地域社会の中で安心して当事者同士や、多様な大人たちと関わりをもち、社会とのつながりを持つことができた。

実績値：・ワークショップ合計34回　・当事者の満足度　91%

要　因：ワークショップの回数が目標値を下回ったのは、1年目の2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、児童養護施設でのワークショップを始められなかったことと、子ども食堂関連の1か所のみでの実施となり、ワークショップの初回が11月からと年度後半になってしまったことが要因。

当事者の満足度については、5段階評価で「とても楽しかった」「楽しかった」と回答した者が91%だった。様々な背景を持つ子どもたちが参加していたが、アーティストらが、一人ひとりの子どもたちに寄り添い、特性や配慮事項にも気を配りながらも、個々の良さを発揮できるような内容を試行錯誤したことにより、子どもたちが、安心して自分を表現することができ、またその表現が認められることが自信や活動意欲につながった。各年度の最終回には発表会を設けて、観客からの拍手や感想をもらう経験も、次への楽しみや期待が高まり、満足度が向上したと考えられる。

課　題：児童養護施設での実施は叶わなかったが、2年目には母子生活支援施設とのつながりができ、地域の中で、様々な環境で暮らす子どもたちがつながる場をつくることができた。課題としては、新型コロナウイルス感染症の影響や、子どもたちの個人情報保護の観点から、観客は子どもたちの関係者が主となったが、今後観客の対象についても工夫することで、より地域社会とのつながりを広められる可能性を検討したい。

②概　要：3つのグループで行ったワークショップを、段階的に交流するようにして、最終的には全てのグループで一つの作品をつくって発表会を開催できた。その過程で、困窮家庭やひとり親家庭、外国にルーツを持つ子どもたち、母子生活支援施設で暮らす子どもたちの交流が生まれた。そして、彼らの支援に携わる団体職員や施設職員なども、子どもたちのワークショップを支援するために、連携や協力を強めることができた。普段のワークショップに全ての関係者が参加することは難しいが、発表会ではそうした大人たちが一堂に会することができ、子どもたちが表現する姿を見守りながら大人同士のつながりを生み出すこともできた。

実績値：・施設+子どもの食堂の数3か所

・実施後アンケートの満足度

実施施設職員や子ども食堂等運営団体3人回答100%

発表観覧者 26人回答94%

・連携協力した団体の数 6 団体

（子ども食堂、プレイパーク、学習支援、日本語教室、

WAKUWAKUネットワーク、母子生活支援施設）

要　因：子どもたちを中心として、彼らの支援のために、関係者の連携と協力が広がっ

ていった。WAKUWAKU ネットワークと当 NPO は、元々同じ区内で活動しているものの本事業を始める前は連携する機会があまりなかった。しかし、本事業を通して、子どもたちにどんな文化的体験が必要かなどヒアリングをしたり、ワークショップの実際の運営に関してアドバイスや送迎などの協力をいただいたりする過程で、相互理解が深まり、各回ワークショップ前後のやり取りや、打合せなどを通して連携を深めていくことができた。また、発表会を行い、そこに母子生活支援施設や WAKUWAKU ネットワークのスタッフらが集まり、評価会議も一緒に行ったことで、それぞれの情報を共有して職員や運営者など、人と人とのつながりをつくることができた。

課　題：子ども食堂や学習支援等に携わる人たちがワークショップなどの表現活動に対して理解を深めてくれたように、当 NPO からも子ども食堂や学習支援などの活動を見学するなどの関わりができると、参加する子どもたちの違った一面を知ることができるなど、支援団体同士の理解もより深まると考えられる。プレイパークの活動の後にワークショップに参加する子どもたちもいたので、プレイパークまでの送迎をしながら見学するなどの方法も検討したい。また、母子生活支援においては、施設でのワークショップの時には、施設長ほか、実習生など複数の方が見学してワークショップについて周知することができたが、発表会は会場が別になり、職員が出かけることが課題にもなったので、より多くの職員の方に発表を見届けてもらう方法も工夫できるかもしれない。

概　要：最終年度の評価会議や、アンケートの実施を通して、事業の評価を行った。ワークショップに参加している子どもたちにとって、多様な子どもたちや大人と出会い、表現活動を通して交流することの意義や課題について、都度振返りながら関係者間で共有、協議することができ、翌年度以降の事業に活かしながら事業を進めることができた。その結果、外国籍の子たちとの関わりや、母子生活支援施設との連携が生まれて、言語に関する課題や交流の方法なども試行錯誤することができた。当 NPO は、普段は学校や児童養護施設等、何かしら枠の中にいる子どもたちを対象とした事業を中心に企画運営している団体だが、地域の中で暮らしながら支援を必要とする子どもたちと出会えたことは、今回の事業が始めてと言っても良い。地域の中に、どんな子どもたちが居て、彼らが何を必要としていて、表現活動のワークショップという手法で何ができるのか、地域の課題に気づくことで、団体の目的や目標を考えていくことができた。

実績値：各年１回、計３回実施

要　因：毎回のワークショップでは時間に限りがあるとしても、年度に１回、改めて評価会議の場を設けることで、落ち着いて事業を振返りながら、子どもたちの変化やワークショップの課題などを丁寧に見つめ直すことができた。また、当 NPO のスタッフだけではなく、WAKUWAKU ネットワークのスタッフやアーティスト、評価アドバイザーとして資金分配団体の方にも立ち会っていただくことで、多角的な視点から事業を見直すことができた。

課　題：評価会議では、子どもたちの支援に携わる多様な立場からの意見を共有することができたが、参加した子どもたちの保護者との意見交換の場もつくれるとな

お良かったかもしれない。子どもたちの送迎でワークショップ後はそのまま一緒に帰ってしまったり、仕事があったりそれぞれの事情もあるので、アンケートやワークショップで会える保護者とは直接のやり取りもできるケースがあったが、時間の取り方などをもう少し工夫すると、保護者の意見も事業に反映できると思う。

4-4-3）アウトカム達成度についての評価（複数の短期アウトカムの達成度を総合的に見て（中長期アウトカム・今後の活動に向けた展望など含む））

- 児童養護施設ではなかったが、母子生活支援施設に暮らす子どもたちや、子ども食堂等子どもの居場所に参加する子どもたちが、アーティスト・ワークショップを通して交流し、当事者同士や、彼らの支援に携わる関係施設や団体、連携機関等のつながりが強化されるという点は達成できた。豊島区内での活動となったが、評価会議でも指摘されたように、「東京都」という広範囲ではなく、今回の場合は豊島区内で、それぞれの子どもたちの参加しやすい範囲内が会場となり、より子どもたちの生活範囲に近いエリアで、例えば演劇を好きな子のグループ、ダンスが好きな子のグループなど、子どもたちのニーズに寄り添う形で継続して場を設けることができたので、参加者が負担なく意欲を持って通うことができるという利点があった。そして、子どもたちの送迎に関しても、近くのエリアに住む保護者に協力を依頼して、そこで保護者とWAKUWAKUネットワークのやり取りが生じるなどの広がりもあったので、むやみに活動範囲を広げるのではなく、適切な会場選びや活動範囲を考慮して、丁寧に人と人とのつながりを築くことで、活動が定着し、人と人とのつながりを深めることができた。
- また、今回は、困窮家庭やひとり親家庭で暮らす子どもたち、外国にルーツのある子どもたちが参加し、中には特別支援学級に在籍している子どもたちも参加した。一人ひとりが直面している困難や必要な支援は多岐にわたるが、そうした多様な困難を抱えた子どもたちへの支援の一つとして、芸術文化にふれる機会が増えたことは、彼らの支援の拡充につながったと考えられる。子ども食堂で食に関する支援、学習支援や日本語教室で学習面での支援、プレイパークで遊びの支援や、その他保護者の就労や居住に関する支援などもWAKUWAKUネットワークを中心に区内で行われていることを知ることができたが、そこに芸術文化による支援が加わり、子どもたちへの支援がより充実し豊かになったと考えられる。評価会議やアンケートからも、子どもたちの変化として、自己表現に自信を持つようになったことや他者との関わりの中で成長する姿が見られたことなどが指摘されており、困窮家庭やひとり親家庭においては、なかなか子どもたちを文化的な活動に参加させる余裕や、そもそも興味関心が少ないという現状もあるが、子どもの時から無償で、しかも身近な地域で芸術文化に触れる機会があることは、多様な価値観に出会い、自らにいろんな可能性があることに気づくなど、彼らが前向きに生きる自立支援の一助になっている。
- ワークショップへの参加や、発表会の開催を通して、彼らの地域社会への参加や自立が促されることで、人と人の支えあいが可能な地域・社会になるという目標の達成にもつながると考えられる。今後も、活動を継続しながら、関わる団体や人のつながり

を広げたり、別の地域でもワークショップのグループを立ち上げたりすることを検討して、どんな地域でどんな暮らしをしている子どもたちにもこのような機会を提供できるようにしたいと考えている。

4-4-4）波及効果（想定外、波及的・副次的効果など）

- 計画段階では、既存の子ども食堂の活動時間や場所の中でワークショップを実施する想定だったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、お弁当を配布する形にするなど子ども食堂が通常の運営方法と異なっているため、ワークショップでは対象となる子供たちを別の機会に集めて実施するようにした。場所の確保や、参加者を集める際に新たに日程を設けるのは不利になるかと思ったが、集団での活動も制限されがちな状況において、対象を絞ったグループで一つの創作に取り組むことで、子どもたち同士の関係性が深まりやすく、普段とは違う関係性の中で新たな子どもたちの一面が見えてくるといった利点があった。
- ワークショップを通して、子どもたちや様々な立場にいる大人のつながりが広がっている。当 NPO では初めて関わることになった母子生活支援施設や、外国にルーツを持つ子どもたちとの関わりは事前には想定していなかったが、自然な形でつながりが生まれた。地域の中には、本当に様々な背景を持つ子どもたちがいることを改めて実感し、演劇やダンス、音楽などの表現活動を通じて、そうした子どもたちや、子どもたちを取り巻く大人のつながりを強化することができると感じた。
- WAKUWAKU ネットワークのスタッフの話によると、既存の行政の支援制度を利用することにあまり積極的でない保護者や、WAKUWAKU の既存の活動に誘ってもなかなか反応がない子どももいたそうだが、ワークショップに誘ってみたところ、そうした家庭とのつながりができ、保護者が、自分の子どもが演劇に興味があることに気づき、そこから他の支援先や活動につながるケースもあったということだった。保護者の状況や考え方、子どもたちの興味関心もそれぞれなので、地域の中に多様な選択肢があることの必要性を感じた。

４-４-5）効率性の向上

- インプットとしては、学校等でのワークショップを行う時と比べても妥当もしくは他より抑えた予算を組んで実施した。アーティストの謝礼に関しては、子どもたちの状況が多岐にわたること、個々の実態や要求に応じて細やかに時に個別化した対応も必要になることから、学校や特別支援学級などでのワークショップ経験のあるアーティストを起用して、質の高いワークショップを実施することができた。
- 会場費に関しては、当初予算より増えた項目もあったが、子どもたちが集まりやすい場所、活動したことのある場所、また保護者が送迎しやすく観客となる人たちも足を運びやすい場所、などを考慮しながら調整した。時期や場所によっては予約がするのが難しい場所もあったが、公共施設も活用して適切な予算執行となるよう努めた。
- 運搬費に関しては、会場が当 NPO 所有の場所ではないこと、新型コロナウイルス感染症対策のための消毒物品などの運搬が増えたこと、また発表の際には照明や音響機材なども持ち込み、普段とは違う劇場に近い空間設定とすることが子どもたちの意欲や

達成感、観客の満足度につながったので、予算よりは増えたが、全体予算の中で調整しながら妥当な範囲で執行できた。

５．成功要因・課題

・ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響があり、初年度のワークショップ開始時期が遅れ、児童養護施設ではなく母子生活支援施設での実施となるなど、計画通りに進まないことには課題もあったが、同じ豊島区内で活動する NPO、WAKUWAKU ネットワークとの連携が生まれたことは、大きな成功要因の一つだったと言える。

・ WAKUWAKU が開催している子ども食堂や学習支援に集まる、ひとり親家庭や困窮家庭、外国にルーツのある家庭の子どもたちとは、これまでの当 NPO の活動では直接出会う機会がほとんど無かったので、そうした子どもたちと出会い、WAKUWAKU の方々が送迎など、子どもたちたちが継続的にワークショップに参加できるようにフォローをしてくれたことは、事業を進める上で大きな力となった。ワークショップ前後の打合せなどで、個人情報に配慮しながら可能な範囲で子どもたちの家庭や学校での様子、家族の背景などを共有してもらい、アーティストたちも内容を検討する参考にしていた。演劇に興味がある子がいる、日本語は苦手だがダンスに興味がある子がいるなどといった情報を元にして、演劇、ダンスなど、子どもたちの興味や関心に沿った場をつくれたことも、子どもたちが継続的に参加したくなる場づくりに役立った。

・ そして、WAKUWAKU を通じて母子生活支援施設との連携も生まれた。母子生活支援施設でのワークショップは当 NPO にとって初めてのことだったが、事前に施設を訪れて施設長他、職員の方と打合せをして、どういう方が利用しているのか、その子たちのためにはどういう内容のワークショップが良いのか相談して、音楽でのワークショップを始めることができ、子どもたちのやりたいことを実現する場をつくることができた。

・ また、発表会においても、そうした WAKUWAKU ネットワークや施設のつながりで観客の方を募ることができ、子どもたちがつくり上げたパフォーマンスの成果を観てもらい、そのフィードバックを子どもたち自身がその場で受け取ることができたことも、子どもたちの自己肯定感や自尊感情を育む要因になった。

・ アーティストについても、当 NPO の活動で日ごろ関わりのあるアーティストの他、子ども食堂等を利用する子どもたちに個人で演劇のワークショップをしていたアーティストとのつながりができた。そして３年目には交流ワークショップを行い、アーティストにとっては普段関わりの少ない、他ジャンルのアーティストと協働してお互いに刺激を受け合いながら一つの作品をつくっていったので、難しさや苦労する場面もあったが、最終的には、興味関心が多岐にわたる子どもたちの想いに寄り添った作品をつくることができた。

６．「つながり」の強化

○ 新たなつながり①母子生活支援施設

母子生活支援施設とは、新たなつながりができた。児童養護施設での実践を通して、子どもたちが暮らす場所の一つとして「母子生活支援施設」という制度があることは知識と

して知ってはいたが、実際に職員の方と連携してワークショップを行ったのは初めてだったので、母子生活支援施設には、どういう境遇の方が暮らしいていて、どのような支援が行われているのかを知ることができたのも、当 NPO にとっての財産となった。

○　新たなつながり②外国にルーツを持つ子どもたち

これまで学校や、児童養護施設の中で、外国にルーツを持つ子どもたちに出会うことはあったが、彼らだけを対象にした事業は始めての試みだった。日本語がほぼ通じない子もいたが、英語や、日本語が多少わかる子どもたちに通訳してもらうこともしつつ、ダンスという非言語のコミュニケーションを通じて一緒に創作ができるということも新たな気づきとなった。また、言語の障害もあり、彼らが学校生活や日常生活でどんな困難を抱えているかを知ることができたし、母子生活支援施設でも外国にルーツがある家庭の利用が増えている現状と、その支援の必要性が増していることを知り、今後彼との関わりが増え、その重要性も増すであろうことを実感した。

○　新たなつながり③アーティスト

WAKUWAKU ネットワークの紹介で、これまでつながりのなかったアーティストと連携することができた。演劇を中心としながらも、音楽や身体表現を取り入れることに柔軟なアーティストであり、彼女自身が WAKUWAKU ネットワークの活動に参加していたネパールにルーツを持つ子たちとの関係性を既に築いていたので、子どもたちとの関係性を築くことや、子どもたちのニーズに応える多様な表現方法を提供するという面でも、彼女が本事業に関わってくれたことは大きな力となった。

また、演劇、ダンス、音楽の異なるジャンルのアーティストが一緒にワークショップに参加して作品をつくることができ、本事業をきっかけに普段交流のないアーティスト同士の協働が生まれ、アーティスト自身が地域の中にどんな子どもたちがいて、アートを使って何ができるかを考える機会にもなった。それは、今後彼らの創作活動にも活かされることと思う。

○　つながりの強化（５）WAKUWAKU ネットワークとの連携

同じ豊島区を拠点としながら、これまで直接的な関わりが少なかった認定 NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワークと連携して事業を行うことができた。参加する子どもたちの募集や、送迎、発表会の集客など運営面のほか、子どもたちやその家庭の状況などを個人情報の保護に配慮しながら可能な範囲で共有し、ワークショップの内容など彼らの直接的な支援に活かせるよう、情報共有しながら事業を協働して実施することができた。

７．結論

７-１事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

・（１）、（２）それぞれ１箇所を選択し、○をご記入ください。

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
（１）事業実施プロセス				○	
（２）事業成果の達成度				○	

７－２事業実施の妥当性

・　今回の事業では、結果的に児童養護施設など施設の中にいる子どもたちよりも、地域でそれぞれの家庭に暮らす子どもたちを中心として事業を進めることになった。元々、子ども食堂などを利用する子どもたちも想定していたが、拠点は児童養護施設と考えていた。また、子ども食堂で既に活動している場の一部の時間をワークショップに当てる想定だった点においても、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、子ども食堂が食事をその場で提供するのではなくお弁当配布型の実施を余儀なくされていたので、このようなワークショップが必要ではないかと思われる子どもたちを、子ども食堂とは別の時間、場所に集めて実施することになった。そのことにより、参加した子どもたち一人ひとりがどのような状況にあり、彼らがどんな課題やニーズを抱えているのかが見やすくなり、それに寄り添ったワークショップを丁寧に組み立てていくことができた。グループごとに、参加する子どもたちの興味関心にそってジャンルの異なるアーティストに依頼したり、区の集会室や劇場などを活用することができたり、アーティストとの出会いや地域資源の活用という点においても、子どもたちがより多様な大人や場所に出会い、地域とのつながりを強化することにもつながった。

・　特定の枠組みのある場所だけにこだわるのではなく、地域の中にいる制度のはざまにいるような子どもたちのニーズに合わせて柔軟に場を設えることが、効果的だったと思う。

・　また、児童養護施設ではなく母子生活支援施設で暮らす子どもたちを対象としたグループでは、ワークショップは施設の中で行うことが多かったが、最終回には地域を出て、他の演劇やダンスグループの子どもたちやアーティストと交流しながら作品に一緒に参加することができたので、施設の中にいる子どもたちを対象とする場合も、施設の外に出て地域と関わるということにおいては、目標を達成できたと考えている。

８．提言

・　今後もこうした事業を継続していくために、引き続き助成金などの獲得に向けて動き出している。しかし、助成金は単年度や多くても数年で区切られてしまうものが多いので、より長く継続していくためには、安定的な予算確保や、できる限り行政との連携も行っていきたい。豊島区では、児童相談所が新たに開設されるなど、子ども支援を充実させていく流れにあると思うので、地域にある NPO が連携して、様々な困難を抱えている子どもたちの支援を充実できるよう、多様な支援策を提案していきたい。

・　また、子どもたち一人ひとりに寄り添う支援を丁寧に続けていくためには、人数の多さや数値で測られる成果だけに囚われるのではなく、例えば人数や場所については、多くて広ければ良いという訳ではなく、少人数や地域の身近な場所だからこそ安心して自己表現をしながら参加することができるといった、NPO だからこそできるきめ細かなノウハウを活かして、地域に貢献していきたいと考えている。

・　そして、食事や学習、就労や居住の問題に比べて、文化的な貧困や体験の欠如については、支援が後まわしにされがちな現状があるが、私たちは、他者との創造的な関わ

りを経験し、安心して自己表現ができる場があってこそ、学習や自分の将来に対して前向きな希望を持つことができるようになると考えている。それは、これまでの障害のある子どもたちや児童福祉施設との関わりを通して、学校の教員や施設職員から認められてきたことではあるが、今回の事業を通しても、文化芸術の役割や効果を、地域の支援団体や施設職員に理解し共感してもらうことができたので、その理解や共感をより社会に広めていきたいと考えている。

・ さらに、障害に限らず、子どもたちの多様なバックグラウンドや特性に柔軟に対応してワークショップの内容を組み立て、子どもたちの支援ができる専門性を持つアーティストの役割がとても大きいので、アーティストが果たす社会的役割についても、理解を広めていきたい。

９．知見・教訓

・ 今回の子どもたちの関わりを通して、「貧困」「障害」「外国籍」など彼らの背景を表す言葉はいろいろあり、その理解も広まってきてはいるが、一人ひとり状況は異なり、一人ひとりに何が必要かも異なることを実感している。また、ひとり親家庭や、外国籍の家庭においては、子育てに困難を抱えやすく、行政など既存の支援策に自力で辿り着くことが困難な場合や、数値で測るような基準では支援策の対象となるほどではなくとも、それぞれの抱えている困難な状況により、より柔軟で多様な支援を必要としているケースがある。そうした環境で暮らしている子どもたちが、十分な支援を得られないまま育つと、学力や文化的な経験における差が生じることが想像される。その結果、一般的な家庭で育つ子どもたちと比べて将来に希望を持つことが困難になるなど、経済的貧困が子どもの低学力、低学歴につながり、所得の低い職業につかざるを得なくなる貧困の連鎖が生じることなども懸念される。

・ しかし、本事業を通して、子どもたちが文化芸術にふれながら他者と協働し、自己表現力やコミュニケーション能力を培うとともに、自分の可能性に気づき、地域の多様な大人たちや支援先とつながったことは、彼らが将来に希望を持って自立していくことにつながるという点で、大きな成果だったと言える。

・ 子どもたちは、一年目こそ、アーティストのやろうとするワークに素直に参加しなかったり、本番直前に出るのを渋ったりする子もいたが、回数を重ね、発表を重ねるごとに、自分からやりたいことをアーティストに伝えて、積極的に参加するという変化が見られた。アーティストが、どんな子どもたちの表現も肯定的に受け止め、子どもたちが否定的な行動を示した場面でも、どうしてそうなったのか子どもたちの想いを受け止めて、その子なりの参加の仕方を一緒にみつけていくような関わり方をしたことで、子どもたちがアーティストを信頼して、この場では自分を表現して良いと安心できるようになっていったと考えられる。

・ 演劇やダンス、音楽に元から興味があるとはいえ、学校のような枠がある訳でもなく、絶対に参加しなければならない訳でもない場なので、アーティストにとっては学校等とはまた違った子どもたちとの関わり方や、アプローチを試行錯誤する場にもなっていた。例えば、一年目の演劇の発表では、台詞がきっちり書かれた台本が用意されたが、台本があることによって、言葉を読むことや覚えることが苦手な子たちが、本来

持っている良さを発揮できないことに気づき、2 年目、3 年目には台本から台詞が減り、最終的には台本ではなく大まかな物語の流れを共有するプロットだけが用意された。それでも、子どもたちは、臨機応変にその場で言いたい台詞を言い、他の子の発言にも場面の状況を考えた上で応答を返すなど、即興的に表現する力が身に付いていた。

・ ダンスや音楽においても、決まった振付や楽曲を練習するようなことだけではなく、子どもたちが踊ってみたい音楽や、身体遊びの中から子どもたちが考えた動きを作品にも取り入れるなど、常に子どもたちの自由さや意欲を尊重しながらワークショップを進めていった。

・ 今回の取り組みを通して、ワークショップの進め方や組み立て方について、私たちスタッフにとっても、アーティストにとっても、子どもたちに寄り添うためにどんなアプローチが効果的かを試行錯誤しながら、こうした場にふさわしい在り方を見つけることができたし、今回得た知見は、今後の活動にも活かしていきたい。

・ また、広報面においては、より広い地域や大人数での成果の方が理解されやすい、という面もあるかもしれないが、その一人ひとりに起こる変化や成果を丁寧に伝えて理解や支援を広げていくことも、こうした活動を続けていくために大切だと感じている。彼らのことを伝える時に、将来的なことや個人情報の保護を鑑みて、顔が分かるなど個人が判別できる写真を使えないことや伝えられる情報に配慮が必要で制限があるのは致し方ないが、アーティストの視点や連携して協力してくれた施設や団体の方からの言葉を伝えるための、冊子や WEB でのコラム記事の公開など、成果を伝えるための広報面でも引き続き工夫しながら事業を展開していきたいと思う。

10. 資料（別添）

① 事業の様子が分かる写真資料

② アンケート結果

③ 記録冊子、コラム記事は、完成後に改めて提出予定。

別添資料

1-1）実行団体名：特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

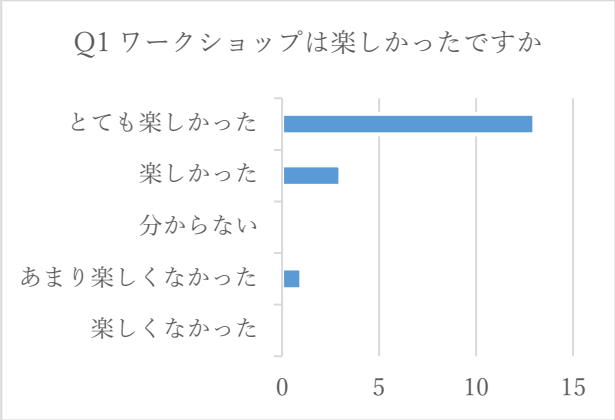
1-2）実行団体事業名：

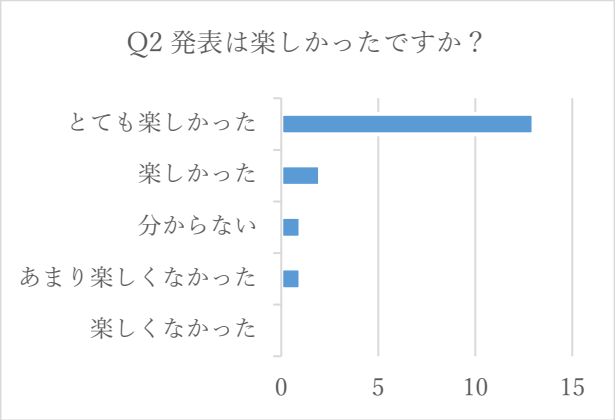
プロの芸術家による表現ワークショップを通じた当事者の交流及び共同創作事業

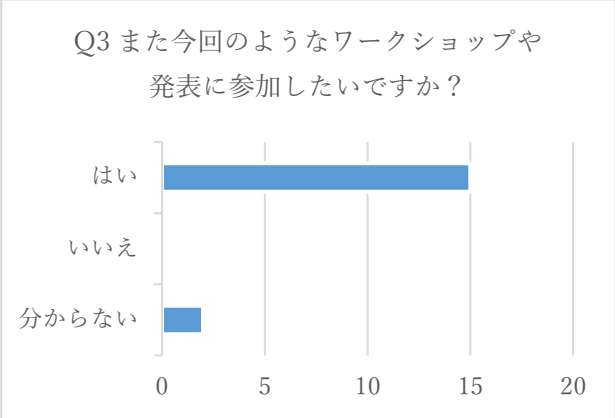
①事業の様子が分かる写真

②アンケート結果

＜ワークショップに参加した子どもたち　回答者 17 名＞



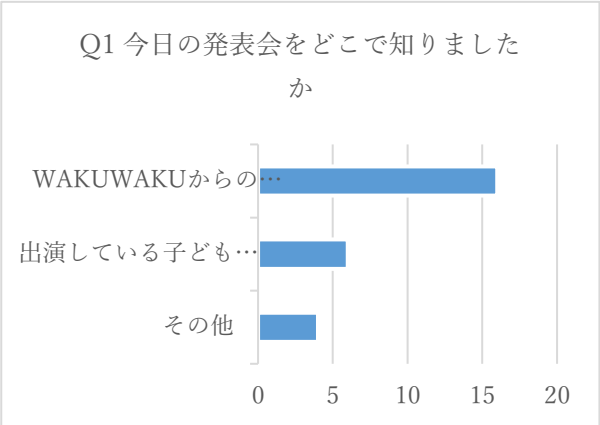


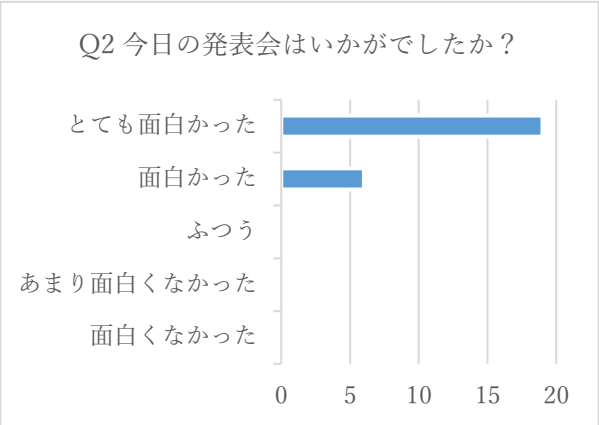


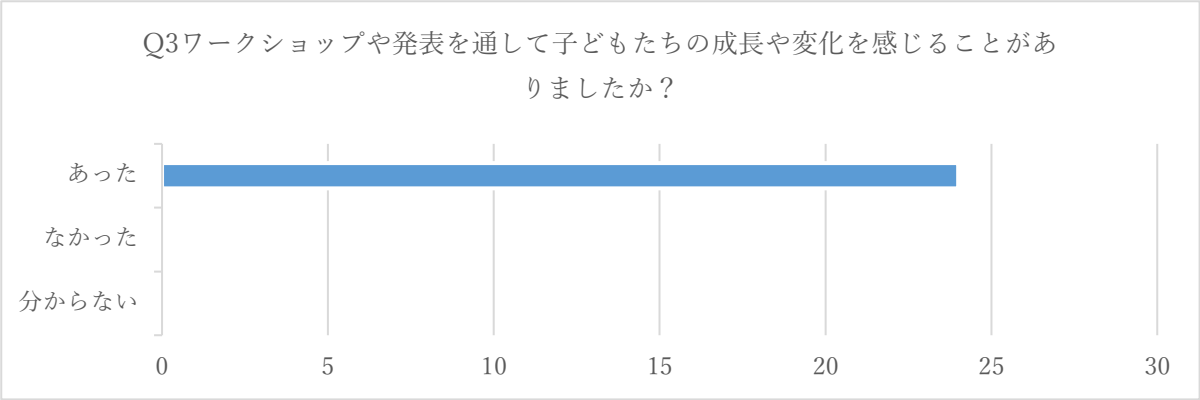
Q4. ワークショップや発表で良かったことやがんばったこと、思い出に残ったこと。（自由記述）

・いろんな人がいて恥ずかしかったけど楽しかった。（演劇・小 3）
・小さい子と親しめて良かったです。またやりたいと思います！（演劇・小 6）
・少し緊張したけど発表できて良かったです。（演劇・小 3）
・I feel shy because it’s my first time.（ダンス・中 1）
・とても楽しかったです。（ダンス・中 1、小 5、小 1）
・鬼をするのが楽しかったです。（ダンス・小 3）
・全く知らない人といっぱい会えたし自分が知らない楽器もできて楽しかったですよ～。（音楽・中 2）
・あまりやったことがない楽器も試すことができてとても嬉しかったです。（音楽・中 2）

＜観覧アンケート　回答者 26 名＞







Q3&4.子どもたちの変化についての具体的なエピソード、感想や意見（自由記述）

●参加した子どもたちの家族

・台詞の表現方法など考えるきっかけとなったのはもちろん、小さい子たちをまとめる大変さも経験できたようです。

・みんなのチームワークが素晴らしかったです。また観たい気持ちになりました。優しい気持ちになりました。

・楽しかったです。

・演劇に興味が出てきた！

・またこのような機会があれば、ぜひ参加させていただければと思います。

・1 回目から参加させていただきました。今回は集大成として素晴らしいステージだったと思います！

●その他 WAKUWAKU ネットワーク関係者など

・普段、飄々としていてクールな感じの子が、こんなに熱い思いを感じるとは…。

・子どもたちのダンスが可愛らしくて楽しく、「ようかい」の世界へ遊びに行く不思議な世界観とマッチしていた。

・人数が多くなってもまとまって頑張っていました。成長を感じます。

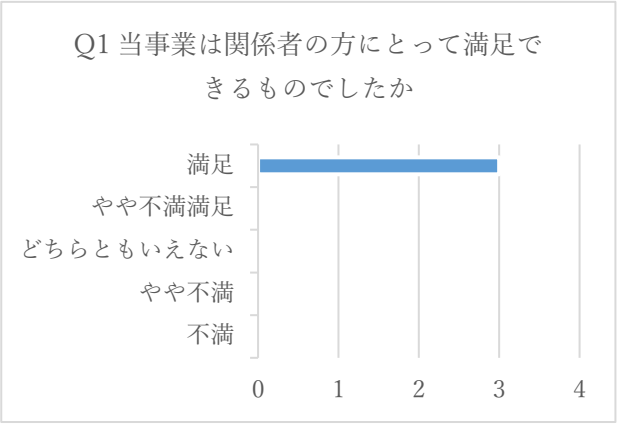
・毎年演出の素晴らしさに感動しています。一人ひとりにスポットライトを当ててくださってありがとうございます。

・昔、カーテンから半分しか姿を見せていなかった子が、台詞を言っているだけで感動しました！

・普段サポートしている子どもたちの生き生きとした顔や助け合う姿が見られてとても良かった。継続していって欲しいと思います。

・毎年進化する様子が伺えたし、珍しい楽器演奏も楽しかった。

＜WAKUWAKU ネットワーク、母子生活支援施設　回答者 3 名＞



Q2. 子どもたちにとって、どんな影響・効果があったと思われますか。（自由記述）

●WAKUWAKU ネットワーク

・昨年までの 2 年間、継続的に参加していた子どもは、2 回（または 1 回）の発表経験とこれまでの達成感を経験しているため、参加前から楽しみにしていた事業でした。月に 1 度の練習も、楽しみにしている様子でした。スタッフのみなさんが常に肯定してくれる場だかからこそ、自分らしく、思い切り自身を表現できたと思います。学校のように、○と×や上手い下手などジャッジされない時間は、子どもにとってとても大切な機会だと H 君の舞台を見て感じました。

・ネパールルーツの子どもの勉強サポートを普段しています。年齢が高くなって来日した子は、日本語習得の困難さもあって、学校生活に自分の居場所を見いだせずにいる子が多くいます。もしくは、馴染むために同化の努力を自らに課しています。昨年、今年と参加させてもらったネパールの女の子たちはみな小学高学年か、中学生になって来日した子達です。去年と今年、どのような経緯でネパールのダンスを披露することになったのかわかりませんが、衣装を身に付け堂々と踊る様子の解放感は、学校生活ではなかなか見られないものであったと思います。

●母子生活支援施設

・普段交流が少ない年下の子どもたちと協力して一つの作品を作るという貴重な経験をさせていただきました。緊張しつつも堂々と演奏をやり遂げる姿を見て、参加した子たちの責任感の強さを改めて感じることが出来ました。

・のびのびとした雰囲気のワークショップを通し、アイデアや希望を正直に話して、それが採用されるという経験もたくさんさせていただきました。普段から自分の持つ考えを素直に話しても良いという自信に繋がったかと思います。最近は、職員に気を遣いすぎることなく、良い意味でわがままに話せることが多くなったように感じます。

・参加した子たちは、発表当日やその後もしばらく、音楽の発表をしてきたことを職員に嬉しそうに報告しておりました。母も、子どもたちの発表を珍しく観に行けたことを笑顔で話していました。

Q4. 関係団体の方々にとっては、どんな影響・効果があったと思われますか。（自由記述）

●WAKUWAKU ネットワーク

・演劇にぜひ参加してほしい家庭は、なかなか送迎や演劇参加に関する協力を得ることが難しい家庭でした。だからこそ、演劇参加のために、毎月親と連絡を取り合い、送迎時に親と会話を重ねて関係を深めることができました。

・毎月の練習を通じて関係ができてきたことにより、発表会にはこれまでお会いしたことがない、子どもの祖母、子どもの母に、お会いすることができました。

・子ども食堂や学習支援、プレーパークのボランティアさんが、発表会に駆けつけてくれました。いつもの顔とは違う子どもたちの様子に、多くの拍手がわき、地域の子どもを多くの地域住民が見守り育てていることを実感しました。

・WAKUWAKU で展開している事業には、専門的なスペシャリストのスタッフはいません。（士業の方は別）。子ども達がその道のプロの方に導いてもらえたのは大変ありがたいことでした。しかも、厳しく正解に近づかせるというような指導ではなく、子ども達の声を聴きながら作品発表に昇華される体験をもたらしていただくというのは、大変貴重な機会でした。

●母子生活支援施設

・ここ数年は新型コロナ流行のため、外部の方との交流・行事に慎重になっていた状態がありました

が、ワークショップと最終発表に参加させていただき、実施の形式や可能性の面で希望が見えたように感じます。

・堂々と本番の発表に取り組む子どもたちを見て、外部の色々な方と交流する機会が、子どもたちの成長に繋がる大きな要素となることを改めて感じさせられました。今後も、子どもたちにそういった機会を積極的に提供してあげられるよう努力したいと感じました。

Q4.本事業に対する、意見、感想、継続のご希望があればお聞かせください。（自由記述）

●WAKUWAKU ネットワーク

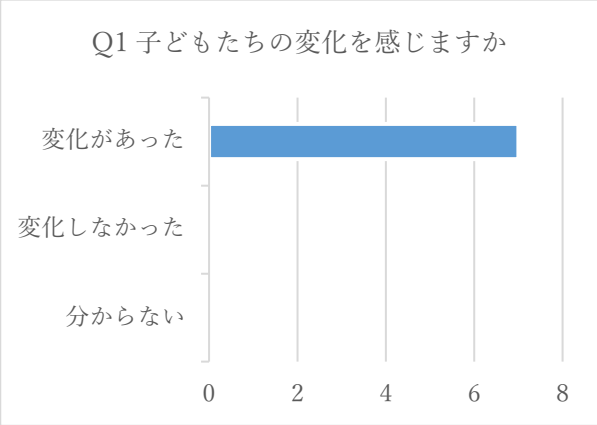
・地域には、さまざまな経験の機会が少ない子どもはたくさんいます。この活動を広く発信して、各地で子どもと芸術家が出会う活動を広げてほしいです。

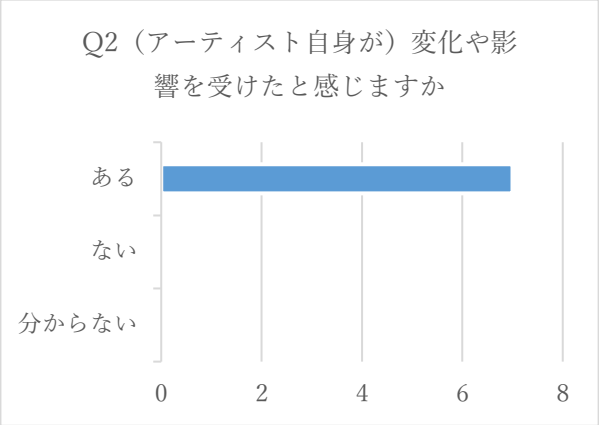
・地域に身近な芸術がある子ども時代を過ごせるのは、大人になったときに大きな宝物としてずっとその人の人生を豊かにしてくれるものだと思います。演劇をみること、生の演奏を聴くことにハードルを感じずアプローチできる人生を、今後も子ども達にもたらしていただけたら、有難い限りです。

●母子生活支援施設

・振り返りの会で申し上げた通り、来年度の参加は難しくなってしまうことが予想されますが、今回参加したのとは別の子など、もし機会がありましたら是非参加させていただきたいと存じております。

＜アーティスト（アシスタント含む）　回答者 7 名＞





Q1. 子どもたちの変化について例えば、意欲や他者との関わり、表現力など、変化を感じる点についてご自由にご記入ください。（自由記述）

・大きく変化しているように感じています。それぞれが人に表現を伝える豊かさも、本番の度胸がどんどんついています。私の関わった子どもたちがネパールやフィリピンからの移民の子たちが多いのもあって、初年度のワークショップでは、初めはうまく日本語で話せなかった子も 2 年目からみんなを引っ張って話すようになったり、私たちを始めとする外部の人間との信頼関係も積み上がってきているのだなと感じています。

・最初は講師である私との交流や、取り組みに対しての戸惑いが感じられるシーンもあった。やがて私自身との交流自体がスムーズになったことは勿論、これをやってみたいという自分の意志や（弾いてみたい楽器を自分から指定する等）、今から取り組むことに対し、よくわからなくともまずはやってみようというリアクションが感じられるようになった。

・特に本番で、いつもと雰囲気が違うと感じたのか子供たちの変化をすごく感じました。一つの作品を作ろうとしている意識がそれぞれにみえ、いつもより良い表情をしている感じがしました。また、子供たちの演劇や音楽チームとの境界線のない交流がとてもよかったと思いました。
・初めて会った頃は口数の少なかった子も回を重ねるごとにリラックスして参加していた。発表会前には積極的にやりたいダンスや曲を提案し、さらに日本語が上達すると学校での出来事や SNS 上の面白い話してくれるようになった。
・大人とのコミュニケーションの仕方は子ども毎に違いますが、回数を重ねる度に「やりたくない」から「まあやってもいい」、最後は「これがやりたい！」と受け身から自発的になっていったことには喜びを感じました。表現力といった点でも自分の得意とすることをやってくれるので、活き活きとしたお芝居を見せてくれていたと思います。子どもたち同士の関係も 3 つ歳を重ねることで、”自分が楽しければ OK”から”みんなで参加しよう”と考えられるようになった子もいてバラバラだった三年前よりも一つのものを作る仲間になってきたなと思います。
・３年を振り返ると、はじめは「個」の印象だった子どもたちが、このワークショップの中で繋がっていくのが大きな変化の一つだったと感じています。

Q2.（アーティストの）創作活動や、他のワークショップ活動など、どういう活動や考え方に影響があったか。（自由記述）
・台本がない演劇をつくろうと思ったのは、このワークショップが初めてです。台本のある演劇しか子どもたちとつくったことがなかったので、どうしたらいいのだろうと思っていました。１年目が終わって、もっとあの子たちが遊んでいるような、いきいきした姿が演劇的な表現にならないかと考えて、２年目からは台本を書くのをやめて（大人たちがシーンの流れを共有する台本はありましたが)、子どもたちなりの言いやすい言葉で、役を纏ってセリフのようなものを言ってもらうことにしました。手探りでしたが、それを見つけていく過程は楽しかったです。その芝居の作り方は、その後にやった他のワークショップでも取り入れています。また、楽器や布などの小道具も、たくさん用意しておいて選択肢があることが大事かもしれない、と気がつきました。前回は布を振ったけど、今日は楽器の方にいたい、という気持ちの子もチラホラいたので、その時の状態で居心地悪くなく参加できる環境を作ってあげたいと思うし、それを OK とするこちらの心持ちも大事なんだと思いました。
・最終的なアウトプットのイメージ、ねらい、押さえておきたいポイントのようなものがありつつも、それに向かうステップや近道、達成を意識せず、その場で起こっている出来事や感じたこと、なりゆきのようなものを受け入れる柔軟性を意識的に持てるようになったと感じている。
・演劇の稽古をしているとどうしても稽古の蓄積に固執してしまいがちだったが、私個人の目指すものは捨ててその日彼らと交流した時間で生まれたリズムや彼らからのわずかな発信を柔軟に受け入れることで新たな表現のセッションができることがわかった。子供たちから教えてもらいました。
・子どもの発想に委ねることにあまり不安を感じないようになりました。元々は、演劇を教えるというスタンスが主で、今でもその側面はありますが、この３年は、こんなことをしたら面白いんじゃないかというヒントを伝え、そこからどこに進むかはみんな次第！となっても演劇としてはありなのかなと。そこに、子どもたちを巻き込んでどのように土台を持ち上げるか、お客さんに楽しんでもらうかを、日々挑戦させてもらっています。
・言葉の通じづらい子どもたちといかにコミュニケーションを重ねるか、ということは自分の表現に

とっても刺激的な環境です。表現の根源に立ち返るような時間を持てていて幸せに思います。また、私自身、芸術による地域活性化活動のようなことを埼玉県の春日部市を拠点に行っており、今回の豊島区での子どもたちとの関わりが、春日部での活動ともリンクし、勉強になっています。春日部では移入民の方々と仲良くなるけれど、なかなかイベントなどに誘っても来てくれません。積極的に自分たちの国のコミュニティから出ることをしません。ここでは、子どもたちを中心に移入民の大人の方もみんな集まって本番の会場で交流することができており、とても豊かな場作りだと思っております。

Q3. 事務局への要望や、やってみたいこと、その他感想や意見など。（自由記述）

・今やっとベースが出来上がったような思いもあります。更に子どもたちとの関係を積み上げて、表現としてもコミュニケーションとしてももう一つ深いところに進んでみたい気持ちがあります。やってみたいこととしては、子どもたちと区民集会所以外の場所で会うこともしてみたいなあと思ったりもします。例えば近くを散歩してみるとか、その程度でも良いのですが、いつもと違う子どもたちの顔をみたり、違う環境と出会ったりする時間を共有してみたりしたいなとぼんやり思っています。

・小さくてもホールで本番を迎える経験をしてもらうのも良いんじゃないかと思いました。

・音楽、ダンス、演劇の合同発表会はほぼぶっつけなので準備するのは大変だと思うのですが、子供達が他ジャンルからの刺激を受けている表情をみると今後も続けてほしいです。

・トップダウンでなくその場で何かを共有しているという安心感がありつつも、参加してくれる子どもたちにとって、気づきや達成感があるバランス感を常に模索してきたいです。

・また引き続きの機会をいただけるのなら、ワークショップの回数がもっとあると嬉しいですし、他チームとも早く合体して「今日はみんなで楽器に触ってみようか」という時間も作ってみたいです。たまにゲストを呼んで、衣装を作ったりとか、小道具を作ったりとか？いろんな大人が関わっていくのも楽しそうです。